

# 宗教学宗教学史学

## ◇教員◇

教 授 藤原聖子、西村明  
准教授 富澤かな、渡辺優  
講 師 李美奈

## ◇学生◇

学部 32名 修士課程 16名 博士課程 20名

## (1) 宗教学を学ぶとどうなるか

昨年までは「宗教学を学ぶとどんないいことがありますか？」と生成系A I と対話しながらイントロを作ったのだが、新鮮味が低下したので、今年はあえて「宗教学を専攻しようと思うのですが、何かデメリットはありますか？」と聞いてみた。

### Geminiの回答：

大学で宗教学を専攻しようという選択、非常に知的でエキサイティングですね！「人間とは何か」という根源的な問いに、歴史、心理、社会、哲学など多角的な視点からアプローチできるのはこの学問ならではの魅力です。

ただ、現実的な「デメリット」や「覚悟しておくべき点」も確かに存在します。進路を決める前に知っておきたいポイントをいくつか整理しました。

### 1. キャリア形成への「直接的な道」が見えにくい

宗教学は「実学（すぐに仕事に役立つ学問）」とは対極に位置することが多いです。

- 資格との結びつきが薄い：法学部なら司法試験、医学部なら医師免許といった「直結する資格」がほぼありません。
- 民間企業への説明コスト：就職活動の際、「なぜ宗教学を選んだのか」「そこで得た能力をどう仕事に活かすのか」を、宗教に馴染みの薄い採用担当者にも納得できるように言語化する力（メタ認知能力）が求められます。

### 2. 圧倒的な「言語・古典」のハードル

研究を深めようとすると、日本語の文献だけでは全く足りなくなります。

- 多言語の習得：仏教ならサンスクリット語やチベット語、キリスト教ならヘブライ語、ギリシャ語、ラテン語、イスラームならアラビア語……といった古典語の習得が求められる場合があります。

- 膨大な読書量：聖典だけでなく、それに対する数千年の注釈の歴史を読み解くため、図書館に籠もる時間は他の学部より長くなりがちです。

### 3. 「信仰」と「学問」のギャップ

ここが最も誤解されやすいポイントかもしれません。

- 信仰を深める場ではない：宗教学は「特定の宗教を信じるための修行」ではなく、宗教という現象を客観的に分析する「科学」に近い立ち位置です。
- 価値観の揺らぎ：自分の信じていることや大切にしている価値観を、歴史的・社会的な文脈で「解剖」されることもあるため、精神的なタフさが必要になる場面もあります。

### 4. 周囲からの「偏見」や「誤解」

残念ながら、現代日本においては宗教に対してネガティブなイメージを持つ人も少なくありません。

- 「怪しい」と思われるリスク：専攻を伝えた際に「出家するの？」「変な勧誘に遭ってるの？」といった無理解な反応をされることがあります。これを受け流す、あるいは丁寧に説明する忍耐力が必要です。

鋭い指摘に冷や汗も出るが、AIが宗教学という分野を認知していることがわかり、少し嬉しくもある。というのも神学（回答内の表現を使えば「信仰を深める」ための学）と同じようなものと誤解されることは実際に多いからだ。

1の実学ではないという点には疑問を持つ人もいるかもしれない。パレスチナ問題やアメリカやイランの政治に関わる時事的問題を理解するのに、宗教の知識は不可欠ではないか、宗教学は社会に役立つのではないかと。それはその通りなのだが、4にあるような、宗教は怪しいと思っている人たちに背景知識を提供すると、「トランプ（or イラン）がヤバイのは、背後にヤバイ宗教があるからなんだ！」と早合点を強化してしまうおそれもある。

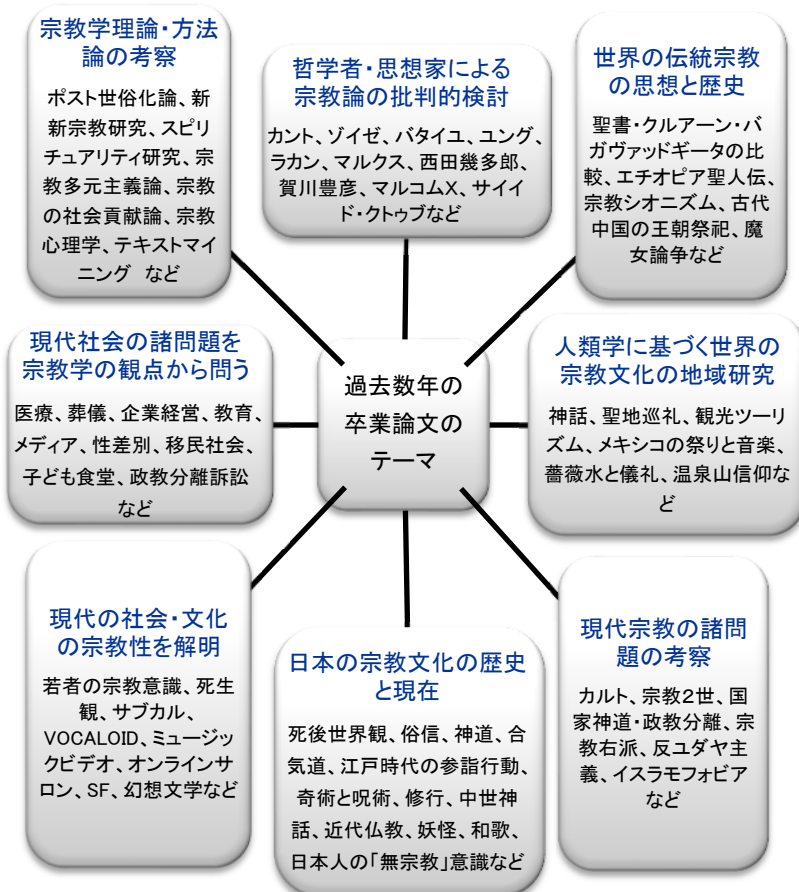
そのようなわけで、宗教が社会的に話題になるのも私たちにとっては痛しかゆしだが、実は宗教へのこうした反応自体も研究対象となる。したがって、これらのデメリットを裏返してみれば、異なる価値観を持つ他者を深く理解する力や対立する二者の言い分をメタな視点から整理する力を鍛えるという専攻の特徴が浮かび上がる。というのも、既存のルールをただ学ぶよりも「人間はなぜそのルールを作ったのか（その根本にある信念は何か）」を掘り下げ、誤解や偏見を生みがちな問題を客観的にとらえることを学ぶ専攻だからだ。そういった力はこれからの流動的なビジネスや国際的なシーンでも汎用性があるということなら自信をもって言える。

なお、2にある古典語の習得は本専修課程では必須ではなく、現代日本について研究を深めることもできる。学生の自由度が高く選択肢が多いというのが特徴だ。

## (2) 学生の関心

本専修課程に集まる学生の問題関心は多彩である。それも研究の分野や方法論が多様なだけでなく、学問的な好奇心の方向、自分の生き方にまで関わる多様性である。それは卒業論文のテーマにもよく表れている。

研究の方法論でいえば、哲学・歴史学・文献学・心理学・人類学・民俗学・社会学などにわたり、問題関心の点からは思想と宗教の関係・地域文化を特色づける宗教的要因・現代人にとっての宗教の意義などが主要なものになっている。近年は、日本人の死生観、医療・被災地現場での宗教的ケアなど、死生学との関連領域のテーマも増えている。



### (3) 専修課程の特質

人類の誕生以来、人間のいるところはどこでも、常に人間と共に存在してきたと考えられるのが宗教である。宗教は人間の価値観や文化形成と密接に関わっているために、古今東西、宗教的世界観や信念に結びつかない・由来しない法秩序や儀礼体系、風俗習慣はほとんど存在しないほどである。当専修課程は、そうした極めて広範かつ多様な領域を相手に、「宗教」とは何かという問題を、様々な視点と多様な方法によって研究する場所である。

学問は客観的であることを目指さなければならない。とはいえ、人間の生死を意味づける宗教を学問の対象として扱うのであるから、単に対象を突き放して観察すれば済む問題ではなく、他者の理解、他者との絶えざる対話が必要となる。また、宗教は世俗を超越する志向性を有するゆえに、人を魅了すると同時に、その外側の社会にとり、非常に危険なものになる場合がある。しかしそのような宗教はまた、社会と無関係というわけでもない。社会の何らかの問題に対して警鐘を鳴らしていたり、あるいは社会の負の部分を出し出す合わせ鏡であったりするのである。つまり、正統的宗教であろうと、異端的宗教であろうと、それを知ることは私たち自身を知ることにつながる。宗教学を学ぶにあたっては、批判的精神を失わず、また自己満足や独善に陥ることのないよう、見識を磨いてほしい。

### (4) 教員の紹介と授業内容

他の専修課程との違いとして挙げられるのは、(平成27年度より)指導教員を定めてはいるが、いわゆる「ゼミ制」ではなく、基本的に全教員が全学生を平等に指導していることである。学生の側からすれば、その時々に関心にあわせて、自由に授業、指導者を選ぶことができる。

**藤原 聖子**：学部では宗教を理解するとはどういうことかという方法論的関心から出発し、西洋近代的な枠組みに基づく宗教学の理論を比較研究のためにどう組み直すか、変化する現代の宗教の諸相をどうとらえるかに取り組んできた。本年度は特別研究期間のため授業を出さないが、通常は、現代宗教現象を読み解くための諸理論を事例につき合わせながら磨いていく講義と演習、従来の世界宗教史叙述を根本的に見直す講義、映像作品を現代の神話に見立てて宗教学の主要理論により解釈することを目的とした講義と演習などを開講している。

**西村 明**：卒論以来、他者への暴力と宗教の関わりに関心を抱いてきた。大学院進学以降は、非常時の犠牲者の慰霊を中心テーマとしている。そこから、より広い戦争と宗教の関わりについても関心の射程となる。本年度は、講義では民間信仰と

現代人の宗教性についての概論と日本宗教史の概説、演習では、ベトナム戦争の戦死者慰霊をめぐる文献講読や宗教学の調査法を取り上げ、内定者向けには宗教学の基礎を学び、ゼミ発表の助走をする演習を開講する。

**富澤 かな**：近代インド周辺の宗教性やオリエンタリズムの問題を、特に言説と慰霊表現に着目して研究している。関心の焦点は宗教と東洋（インド）と死である。まともに見えるかと思うが、これらはみな、近現代において世界と日常から疎外されてきたものである。そこに見られる、人間が自／他を分かち・結ぶ思考と行動のあり方に関心を持っている。本年度は、Sセメスターは食と生を、Aセメスターは共有をテーマに、インドを入口にした講義と演習を行う。

**渡辺 優**：「他者学」としての宗教学に惹かれ、信じる者の言葉を共感的かつ批判的に吟味することの醍醐味を知り、宗教思想研究へと向かう。近世西欧キリスト教圏に輩出した神秘主義文献の考究を軸に、「神秘主義」を再定義し、別様の「宗教」思想として現代に語りなおすことを試みている。本年度は、宗教学の諸問題を扱う概論、古代から現代までの西洋神秘主義思想史を通覧する特殊講義を担当するほか、演習では、神秘主義の近現代的展開に関する複数の論文、リクール、ニーチェ、セルトーのテキストを講読する。

**李 美奈**：「ユダヤ」の在り方がどのように構築されるかに関心を持っている。建築学と宗教学の2つの大学院で、近世イタリア・ユダヤ社会の空間や思想を対象として、自己と他者を分ける境界線やその間での応答に着目し、そこで形成されるユダヤ教の姿を研究してきた。本年度は、講義ではユダヤ史の概要を扱うが、各時代について研究されてきた問いや歴史観の背景にも踏み込む。演習ではヘブライ語聖書を中心に、ユダヤ教やその他多様な宗教・分野で展開された解釈の歴史を学ぶ。

この他、毎年、3～4名の非常勤講師を招いている。

## （5）卒業論文と卒論ゼミ

学生は各自の問題関心に沿って履修科目を選択し、各自の研究を進めることになるが、専修課程に進学後、新しい問題に目覚める場合も多い。だから焦って早くから自分の興味の幅を狭める必要はない。期待されるのは自分でよく考え、見極めていく姿勢であり、先人の業績を批判的に継承しつつ新たな問いを発していく目的意識と気概である。そのための挑戦の場となるのが「卒論ゼミ」であり、その成果となるのが卒業論文である。

卒論ゼミは毎年Aセメスターに開講する。その趣旨は、複数の教員の出席のもと、4年生は卒業論文の内容に関する研究発表を行ない、それを元に出席者全員で質疑応答を行なうことで、卒業論文の質的な向上をはかる点にあり、また3年生にとっては自分の問題関心に沿った研究あるいは重要文献の紹介を行ない、将来の卒業論文執筆に向けた準備を整える点にある。

卒論については、この全体の演習のほか、希望者に対する個別指導体制も充実を図っている。卒論執筆は就活と関係ないという思い込みがよくあるが、実際には、卒論ほど問題発見・解決力、コミュニケーション力が総合的に問われる課題はない。また、論文の書き方に関する指導書は数多いが、自ら書いてみて、それに対して他人から指摘を受けてはじめてわかることも多い。一人ひとりにカスタマイズした指導により、納得のいく卒論を書きあげられるようサポートしている。

## (6) 研究室について

宗教学研究室は迷路のような法文2号館の3階にある。ここには宗教学関係の事典や入門書がそろい、プリンター、スキャンも可能なコピー機があって、学習や発表の準備にはとても便利だ。相談役の教務補佐員、事務補佐員が常駐している。非常勤講師の控室でもあり、大学院生も頻繁に出入りする。昭和初期から愛用されてきた、木製の大テーブルを囲んでの、学問的な語りや雑談、就活の情報交換、有志の勉強会などに利用されている。

研究室の恒例行事は研究会、忘年会、予餞会など多々あるが、最も重要なのは1泊2日の研究室旅行である。学部生・院生・教員の親睦をはかりつつ、様々な宗教施設を見学するもので、3年生の歓迎会の意味もある。

## (7) 卒業後の進路

就職先は、公務員・コンサル・情報通信・金融など、文学部全体の傾向とほぼ同じである。在籍中に宗教学独自の資格「宗教文化士」を取得することもできる。世界の宗教の歴史と現状について一定の理解に到達した者に認定される。研究者を目指す場合は宗教学専攻の修士課程に進学することが多いが、関心にあわせて他の専攻や他大学の院に進むケースもある。